

匠 瑳 探 訪

暮れの騒動

年の瀬も近づいた1863年（文久3年）11月24日、八日市場村（中央地区）見徳寺に集まっていた村の有力者らに、50両の借用を申し出た集団がありました。

これは、生活に苦しむ人びと

の救済と九十九里沖に現れた外国船を打ち払うことを目的に掲げ、真忠組（しんちゅうぐみ）と名乗る200人ほどの浪士たちでした。

12月12日、八日市場の商人ら7人は100両を真忠組に差し出し、これを活動資金として拠点を現在の九十九里町の旅館に置き茂原の寺を出張所とし行動を始めました。

12月26日には八日市場の福善寺が屯所（とんしよ・たむろする所）となり10数人が居すわりますが、組の幹部に同村の出身者がいたことで、当時、茂原や東金とともに富裕層が多かった八日市場村がターゲットにされたのでしよう。

隊員たちは九十九里周辺村むらの役人や富裕層から金銭、米、武器などを強要しました。市域では大寺、飯塚、内山村（豊和地区）、春海村、椿海地区などの農家が被害にあいました。これらの村には真忠組に参加した者がいて、その手引き

かつて10数人の真忠組が居座った福善寺

で押し入ったものでした。出身地のわかっている隊員140余人のうち19人が市域の者で、堀川村（栄地区）の2人も含まれていました。

真忠組は、集めた金銭や品などを困っていた農漁民らに分け与えました。八日市場村でも暮れの27日に50両が村役人を通じて193人に分配されました。

また、農民の申し出により訴訟を取り扱ったり、商人に値段の引下げを命じるなど民衆の立場に立つたことで支持された面もありました。

しかし、真忠組のこうした動きを幕府が放っておくわけはなく、略奪が始まって20日ほどした1月11日ごろから佐倉や多古、一宮藩などが動き出し、同月17日、この1日であっけなく壊滅し、隊員はさられたり捕らえられたりしました。

143年前の暮れから正月にかけて、東総一帯にふきあれたこの騒動は短期間のうちに静まったものの、生活の苦しい農漁民自身が立ち上がろうとするきっかけになった、との評価があります。

被害を受けた村の商家のほとんどが今はなく、真忠組騒動の話は伝わっていません。

関八日市場図書館

☎73・3746

